

60周年迎え一層の飛躍目指す

浜松市のミダック

処分場新設を計画

水処理、焼却と「三種の神器」

廃棄物の収集運搬から中間処理、最終処分までを一貫して手掛けるミダック（浜松市）は今年、創業60周年を迎えた。水処理、焼却、最終処分という「産廃処理の三種の神器」を事業の軸に据え、着実に事業拡大を図ってきた。今後は新たな最終処分場の建設も計画している。矢板橋一志社長に、今後の取り組みや目標などを聞いた。

（黒岩修）

標榜するようにはしていない。もともと廃棄物処理法の趣旨である、公衆衛生の向上と生活環境の保全に資する事業に取り組んでいく方針だ」

—今後の展望は。

株式会社上場視野に 経営体質を強化

—今年、創業60周年を迎えたが。

「1952年に小島清掃社が設立され、96年に現在の社名であるミダックに商号変更した。これは『水、大地、空気』の頭文字を取ったもので、社内公募で決定された。72年に静岡県議の許可を得て収集運搬、最終処分業を開始。86年には浜松市に水処理施設を開設、88年には浜松市から産業廃棄物・特別管理型産業廃棄物・特別管理型産業廃棄物処分業の許可を取得し、管理型最終処分場を完成させた。また、2002年には富士宮市で焼却施設が稼働している」

—新たな取り組みは。

「現在保有している最終処分場は残余量が少なくなっているため、新たな処分場の建設を計画している。最終処分場に関しては一般的に建設するとは難しくなっていたが、東日本大震災以降、その必要性が見直されている。静岡県も東海大地震の発生に備え、処分場の確保を図ろうとしている。こうした状況下で、理解を得やすいのではないかと考えている。埋め立て容量300万立方メートル以上の大規模処分場で、インターチェン

ジのたもとと非常に立地が良く、実現すれば静岡のみならず関東や関西も商圏になると見ている」

—目指す将来像は。

「いずれは株式上場を果たしたいと考えている。そのために新たな処分場も含め、われわれの株式に投資してもらえるような事業計画をきちんと立てていきたい。最近廃棄物処理業界ではエネルギーやサイクルといった方が向いてきている。しかし、われわれの経営姿勢としては、水処理、焼却、最終処分といういわば「産廃処理の三種の神器」とも言うべきものを経営の軸として、しっかりと取り組んでいくこと、これに創業以来こだわっている。ことさらにサイクルを

「毎年会社説明会を開催し新卒採用を行っているが、全国から優秀な人材が入社してくれるようになり、若い世代の定着率も高くなっている。私も営業部長から抜擢されて社長に就任したが、産廃業界のまだまだ大半を占める家業のイメージから、企業へと脱皮しつつあるのを感じている。こうした流れをさらに進めていきたい。また、次のステップとしては海外での事業展開も視野に入れていく。アジア諸国などの需要も見極めながら、いざいざ海外事業を進めていきたいと考えている。微量PCB処理なども検討していく方針だ」



ミダック社長

やいたばし かずし
矢板橋 一志氏に聞く